
中身の入った蝉の脱殼

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

中身の入った蝉の脱殻

【Zコード】

Z6041C

【作者名】

雨月

【あらすじ】

神塚高校一年生とのある生徒・・・彼が嫌いなものは悲しい話と血が出る話・・・彼は七不思議に巻き込まれていく。

始まり（前書き）

少々、初めのほうはまだコメディーのような感じがせず、中途半端怖い話になっています。そういうのが嫌いな人は読むのはやめたほうがいいかと・・・

始まり

ぬいぐるみのことを俺が親戚に尋ねたのは結構前の話だ。そのと
き、尋ねた親戚は

「ぬいぐるみとはそのものの抜け殻である・・・つまり、せみの抜け殻のようなもの」と答えられて俺はその後、小学校を卒業するまでそのことを信じていた。持っていた熊のぬいぐるみの中身が真っ白な綿であることを俺は

「抜け殻の内部である空虚をうめるために存在しているもの」と認識していたし、中身の詰まっているところを見たくて俺は動物百科を買つたりしたものだ。夏にはセミの抜け殻ができる場面にも立ち会つた。しかし、ぬいぐるみ関係のことは当然のように関係することなく・・・俺がそのことが嘘だったということによく気がづいたとある小学校最後の思い出が過ぎて域・・・高校生となつた今では、そんなことはないのだが・・・

プロローグ 壱

「・・・七不思議？」

「ああ、そうだ」

俺の名前は碌名視驟雨。
ろくなじゅぎう

「驟雨は興味ないか？」

「高校生にもなつて・・・まあ、面白になら話してくれ」

じんづか
神塚高校の一年生だ。

「それなら、とつておきだらうな・・・」の神塚高校のとつておき

だぜ？」「

「何だ？」

趣味は読書。

「・・・学校裏に“ゴミ捨て場”と言われている大きな穴があるだろう？読書している奴なら知っているだろう？図書館の裏側だ。」

「ああ、よく見るな。あれは深さ約十メートルで五メートル四方の奴だろ？」

嫌いなものは悲しい話と血だ。

「・・・悲しい怪談話ならやめてほしい。あと、血が出てくるような話も駄目だ。新学年早々、一人で暗くなりたくないからな」

「そうか・・・それなら、やめておこう」

俺はその日、その怪談を聞いておくべきだつただろう・・・なぜなら、その怪談関係のことに俺は巻き込まれてしまつたからだ。別に、いやみで言つているわけではない。

「・・・話聞いたりして巻き込まれたりする奴か？」

「まあ、どうせ聞かなかつたんだから巻き込まれることはないだろう？」

俺の友達も、誰も知らなかつたのだ・・・

「話を聞かなかつた奴が巻き込まれる・・・」といふことを・・・

俺はその日、先生に呼び出されて用事を終わらせた。既に部活をしている生徒たちもちらほらと着替えて帰宅を急いでいるようだつた・・・今更だが、俺は昼休みに話していた友達との会話を思い出したのだった。既にその友達は帰つてゐるのでここにはいない。

だから、今度聞けばいいだらうと思つて家に帰るために校舎を後にした。

神塚高校七不思議の一つ『蝉のなく日に訪れた悪夢』

神塚高校は昔、女学校だった。

蝉時雨が堪能できる暑い日、昔から「ヨミギ捨て場」として使用されたいた場所があつた。

そこで、血まみれの女学生が発見された。

発見された当初はまだ、息があったので病院に搬送されたのがよかつたのか知らないが、彼女は一命をとりとめた・・・だが、その後彼女は死ぬまでずっと誰とも話さなかつたそうだ。彼女が死んだのは一週間後・・・そして、その彼女の幽霊と思われる時期はそれから一週間後・・・そろそろ蝉時雨も終わりを迎えるという時期だつた。別に何をするでもない・・・というはずだつたのだが、事件が起こつたのは数年が経つてその高校に男子生徒が通うようになつた後だつた。

ある日、一人の男子生徒がその場所を通つた。

事件が起こつたのはその日。いつかと同じように男子生徒は血まみれで発見された。屋上からの飛び降りだつたそうだ。事件は表上、普通に片付けられたようだつたが裏のほうではその話が蔓延していった。いつの間にか、この話を興味を持つたが聞かなかつたものだけにその幽霊が現れるようだ・・・といううわさがたつたのであつた。彼女はただ単に、男の友達が欲しかつたそつだ。だが、その性格上、嫌われてしまつたとのことだつた。

始まり（後書き）

さて、この小説では怖いながらも乐しことこつた感じにしていただきたいと思います。

返り物（複数形）

第一回田・・・まだ、『メモリー調ではあつません。

気づか

一、

校舎をぬけると、少々そこから校庭の端のほうを通りて自転車置き場が一年、二年、三年と続いていく。

その次にバイク小屋が置かれていてさらにその先に教員用駐輪場がある。

その先を抜けると東の校門となり俺の家からは遠ざかつてしまつたが教員たちはこちらのほうから安全上、出て行ってほしいようだ。何でも、西側・・・うわさの立ちこめる図書館とこの高校の資料館、そして旧図書館がその姿を見せる。

ちょうど、暗がりになつたり職員室などからは死角になつてしまい、そこでは俺の口からはいえないようなことがあつたり、行われたりしているらしい。

まあ、俺が通つている高校にそこまで不良な奴はいないうのでくだらないことなのだろう。もしくは、この高校は男女間について口づひるさい高校だから密会があつたのかもしれない。俺にはその密会する相手がひとりもないないので関係ある話ではないのだがね・・・。それと、噂されている「ミミ捨て場である大きな穴が関係していてただたんに危険なのかもしれない。

「・・・さ、帰るか・・・」

東を見ずに俺は危険とそれでいる西のほうへと向かっていく。この時間帯なら夕焼けを浴びることができるので・・・残念ながら巨大な木が邪魔をしていてちょうど見ることができないので暗い。

「・・・・・」

しゃべる相手もいないのでただ単に、黙々と歩いて帰る。自転車が使えればいいのだが、あいにくこの前壊れてしまった。今は修復中で俺は毎朝、仕事に行くついでとして父親に車で近くに下ろして

もらつてそこから通つてゐる。帰りは電話をしてもかまわないといつてゐるがそこまでの距離ではないので健康のために徒步で家に向かつてゐる。

「・・・・・」

最近、俺はこの世界に對して微妙に不安を感じてゐる。ちょっと、おかしいのではないかと思つてゐるかもしね。それが、正しくない、正しいといふのはどうだらうかと思つただが・・・まあ、そんなことはどうでもいい。

そんなわざとを考えながら歩いて約五分が経つただらうか？一定歩数で歩いていた俺は大きなゴミ捨て場に差し掛かる。

「・・・・・」

俺は一警することもなく、その隣を歩いていく。視界の端にちらりとだけ黄色と黒の危険を示すであろう、ロープがはいつたが、それ以外は何も見ることができなかつた。

だが、俺の耳には異常な音が聞こえてきていた。

ガチャリ・・・

例えるなら・・・鍵を開けたときの音。周りには確かに建物があるが、そのような音がしたことなど一度も聞いたことがない。この時間帯に鍵をかける人はまだいはずだ。

「・・・・・」

振り返つてもしかしたら非日常に飛び込むか、このまま歩いて帰つて明日の勉強をするか・・・

俺はその前者・・・絶対にどちらかしか選ぶことができないであらう選択肢二つのうち、一つを・・・選んだ。後悔がなかつたとはそのときは思つていない。後悔といつものほ後から悔やむことだ。

そこにはこの高校の昔の制服を着た黒髪の少女が立つてゐた・・・血まみれで・・・

「・・・・・」

俺は尻が濡れていることに気がついた。いや、失禁してしまったわけでもなく・・・ただ単に、湿った地面に腰が抜けてしまつていただけだったということだ。いや、誰だって田の前に血だらけの女子生徒がいたら田を疑う前に自分の正気を確認するだろう。だが、俺の場合は畠休み話していた怪談話を思い出していた。

「・・・・・」

何かを発することなく、彼女は俺に一步近づいてきた。俺はしおちをついたまま、一步下がる。

ゴフツ・・・

彼女は一步歩ぐとに口から血を吐いた。

「・・ひー・・・・・」

情けない悲鳴が俺の口から出でくる。だが、今はそんなことを言つていい場合ではないことはわかつていた。別に彼女に恐怖したわけではなく、いきなり吐血したことに驚いたのだ。いや、血だらけの彼女を見ても恐怖していない自分の神経がおかしいということに気がついたほうがいいのかもしれない。

また一步、彼女は近づいてきた。俺は一步、下がる。こうしていけば、離れることができるに違いないと思つた俺だったのだが・・・血だらけの彼女は血を撒き散らせながら俺の目の前で倒れた。

「・・・・きゅう・・・・きゅう・・・うしゃ・・呼んで・・くださ・・・・」

「

俺の耳に蒼聞こえるようにだけ言つて彼女は動かなくなつた。

「え・・あ・・・・」

パニックしている俺の頭の中では

「今までおぼけだった存在」は

「怪我をしている」の高校の生徒」という感じに変わつた。携帯を取り出し、あわてて救急車を呼ぶ。

その後、俺は警察に事情聴取をされていた。まあ、当然のことだ

るつ。

「・・・ようやく、開放されたかあ・・・」

そろそろ面会時間が終了を迎える時間帯といふことで俺は病院の中に入ろうとして・・・先ほどの血だらけ娘が頭に包帯を巻くこともなく、俺の目の前に姿を現していたのだった。
聞いた話では、外傷はまったくなかつたそうで・・・健康体だそうだ。

しかし、体についていた血は間違いなく誰かの血だつたそうだ。
彼女がいたと思われる大きなゴミ捨て場付近には俺が気がつくことのなかつた赤色の水溜りができていたらしく・・・その量は人間が死んでしまう量を超えてしまつていてらしい。とりあえず、どこかで人が死んだのだろうということで警察たちがあの付近を捜索しているそうだ。まあ、俺には関係の話だらう・・・とりあえず、今は目の前にたつてゐる少女についてどうかしたほうがいいだろ。

「・・・・・」

目の前の少女は何も話さないし、俺をじっと見てゐるだけだ。そうされても俺が何かしたほうがいいというわけでもないのだが・・・
そうだ、そういえば、彼女は一人暮らしだつたということだつた。
他にも情報をもらつたしとりあえず、何か話したほうがいいに違ひない。

「えつと、瀬見津夏華さんだよね？」

「・・・・・」

警戒をしているのだろうか？あからさまに俺に対してもういい視線を送つてこない。その目は間違いなく、俺を怖がつてゐた。

「・・・・・私を怖がりましたね？」

どうやら、俺が彼女を見つけたときのことを言つてゐるようだ。
つまり、彼女はその理由で俺に対してもういい視線を送つてこない。その目は間違いなく、俺を怖がつてゐた。
あ、考えようによつては自分が大怪我をしてゐるような状態（いや、彼女の場合は怪我をしていなかつたが。）で誰かに助けを求めたのだが、その相手は自分を化け物だと思つてゐた・・・ということだ

る。彼女は誤解しているようだ。

「……いや、君を怖がったんじゃなくて、いきなり・・・君が血を吐いたことに驚いたんだ。俺、ちょっと血を見るのが苦手で・・・」

これは事実だ。大量の血が出る何かを見てしまうと貧血を起こして倒れてしまう。過去にも、自分の血を抜いただけで顔が真っ青になり・・・そのまま病院行きになってしまったこともある。

「・・・本当でしょうか？あれだけの理由で私にあのような目を向けたりしないと思いますけど？」

一陣の風が吹き、俺と彼女の間に割ってはいる。その風で彼女の長い黒髪がぱつと広がって再び落ち着く。その目に浮かぶ色は疑惑・・・つまり、俺の説得は失敗ということだ。結構きれいだったからお近づきにならうと思ったのだが・・・半分本当半分嘘のことを言つても信じてもらえないなら本当のことと言つしかないのだろう。

「本当の話、俺・・・昼休みにこの学校の七不思議のとつておきを友達から聞こうとしたんだ。それで、ちょうど・・・夏華さんが倒れていた付近にその話していた大きな穴があつたんだ。だから、てつくり・・・その七不思議に出てくるお化けだと思つたんだ」「七不思議・・・？でも、それはその内容とちょっと違う・・・」

「ああ、俺は実際には聞いていないんだ。悲しい話だつてそいつから聞いたからね・・・」

「・・・・・」

唐突に押し黙り、俺見てくる。彼女の目は奥のほうをよく見れば琥珀色をしていた。血だらけとなっていた昔の制服はなくなつており、新しい制服を着ている。

「・・・そういえば、命の恩人の名前を聞いてなかつたわ・・名前、教えてくれない？」

「俺？俺は・・・碌名視驟雨」

「・・・驟雨・・・なるほど・・それなら・・・」

彼女が何かを言おうとするとき彼女の後ろから誰かの声が聞こえてくる。

「・・・すみません、もうここ閉じますので面会の方ならそろそろ帰つてもらえませんか？既に面会時間が終わっていますので・・・」

看護師さんがそういうて俺たちをせかす。

「あ、すみません・・・」

俺たち一人は病院の外に出たのであった。

「・・・これから、私の家に来る？」

「・・・いや、いいよ・・・俺も家に帰つて両親に話さないといけないし・・・」

そういうと彼女は少しだけ悲しそうな顔をした。失礼だが、彼女は悲しそうな顔をしていると儂げな印象もあいまつてより、美しくなる。

「・・・どうしたの？」

見とれていたのだろう・・・ぼそつとしていたのが悪いのだろう。

・・俺はいつの間にか田の前に立つていて彼女に驚いて後ずさる。

「・・・びっくりした！」

「え、ああ・・・」めん

彼女にはまったく非がないのだが・・・彼女は俺に謝った。

「・・・え、いいよ・・・」

「そう？それよりさ・・・今度、私の家に来てくれませんか？」

「え？と、何で？」

不謹慎なのが、俺は彼女がいないのでそういうことをいわれる
とどきりとしてしまつ。

「・・・私、友達できにくいんです。元々、根暗な性格だし・・・私が血だらけだと連絡してくれたのが同じ高校の生徒でよかつたです
よ

そういうって本当に

「よかつたあ」という顔をする夏華さん・・・

「じゃ、じゃあ・・・今度お邪魔させてもらひよ」

俺はそういうて彼女と別れた。彼女の微笑む仕草を見ながら俺は

彼女が血だらけであつたことに感謝した。まあ、そのときは別に・・・
・ そう、別に彼女がおかしい人だと一ミリも思わなかつた。
しかし、世の中陰険なものであると氣がついたのは彼女の家に向
かう途中だつた。

変わる（前書き）

読んで感想なんかいただけぬといわれしこです。

変わる

二、

「…………夏華？」

隣にはあの七不思議のことを俺に話そうとして結局話すことのなかつた友人がいる。今、彼の目には不思議そうなものを見ている気がする。

「…………知らないのか？瀬見津夏華…………」の高校にいるだろ？

「瀬見津…………いたつけ？」

その友人は俺の話しに首を傾げながら考え込んでいたようだった。まあ、夏華さんのことは今はどうでもいいや。

「…………いや、それならいいんだ。それより、七不思議のとつておきを聞かせてほしいんだけど？」

「ああそれな…………」

少しだけ気まずそうな顔を俺に向けてくる友人。

「…………ちょっと、ど忘れしちまた」

「そうか、それならいいや」

別に忘れたのならどうでもいいだろう…………。そういうって俺はその話を聞くことなく、夏華さんの住んでいる家へと向かったのであった……正直、話を聞いていれば間違いなく俺は彼女の家に行くことなかつたのかもしねれない。

「…………ここで合っているよな？」

目の前に建つてるのはこの町で一番おかしいというぐらい大きな屋敷だった。俺だったら屋敷といわれたら洋風の家を想像するのだが……彼女、瀬見津夏華さんの家は日本風で趣のある家だった。家の門の隣に石灯籠が置かれてある。扉の端のほうにはセミのマークが彫つてある。

「…………チャイムもないようだけど…………どうしたらいいんだ？」

きょろきょろ見ていると扉の上のほうに神社の鈴を思い浮かばせるように一つの風鈴みたいなものがその姿を夕風に靡かせていた。どうやら、それが現代のチャイムのようだ。

それを鳴らして少々の時間を要して・・・中から人が現れた。

「・・・いらっしゃいませ、ちゃんと来てくれたんですね？」

「え・・まあ、約束・・・したから」

「約束・・・か」

少しだけその“約束”という言葉に反応したのか、彼女は少々さびしそうな表情を見せたのだがいつものようなちよつと無表情な顔を見せる。

「・・・あがついですよ。誰もいないから気にしないでいいです」

「それじゃ、お邪魔して・・・」

一つ、扉の門をくぐると中は緑のコケに覆われたりした石やシシオドシ？を確認することができる。ここにも石灯籠らしきものがその姿を否応なしに確認させられる。他にも、大きな木があつたりして・・・きっと、夏には蝉時雨が堪能できるのだろう。

「大きな家だな？」

褒めたつもりなのだが・・・

「・・・そうですか？一人暮らしをしている私としては逆に、悲しくなりますよ」

そう切り替えられて俺は彼女と共に家の中に入るまで何も言えなくなってしまった。何か話しかけようとしても彼女と親しいわけではないので会話が思いつかなかつたのだ。

家中に入つてお茶を出され、俺は場所が場所だけに緊張しまくりだつた。通されたのは彼女の部屋なのだろう・・・たんすや畳が味を出していてどうにも、今風の女の子の部屋とは思えなかつた。

「・・・あの、どうですか？」

俺の視線に気がついたのかどうか、知らないが・・・彼女はそう尋ねてきた。

「ああ・・・お茶？ おいしいよ？」

「よかつた・・・」

ほつとしたような表情を見せる彼女に心和ませながら俺は再び、居心地の悪さを感じながらどうしたものだろつかと考えた。一人きりになつても別に話すようなことがない。会話の中では成立しやすい趣味の話をしようにも彼女の趣味などをまったく知らない。

「あ、あの・・・」

「え、と、何だ？」

話題に困っていた俺の耳に声が聞こえてくる。間違いなく、彼女は俺と何かを話したがっているのはわかるが、俺の頭の隅で「覚悟をしておいたほうがいい」と警告していたのであった。

「・・・七不思議、興味ありますか？」

「七不思議？」

夏華さんという見た目麗しの人物からでた言葉は少しばかり怪しい言葉でもつた。

「まあ、興味があるつていうか・・・よく知らないからなあ。話してくれるのか？」

「・・・勿論話させてもらいます・・・とつておきを・・・」

ちょうど、その話を聞きたいと思っていたのだ。俺は正座をして話を始めようとしている彼女のほうを見る。

「・・・これはまだ私たちの高校が女学校の頃にできた話です。だから、私たちの高校では七不思議に出てくる人物たち・・・つまり、その七不思議にはすべて女生徒が出てくるんですよ」

小ねたをそのようにいつて前置きとしたのか・・・彼女の表情が何か寒いものに変わってきた。無表情で、寂しそうな顔だった。

「・・・・・・私が今から話す七不思議は私たちの高校の生徒会長だつた人の話です。彼女は勉強ができるいて先生たちからの評価も

高い人物でした。しかし、性格が災いしたのか知りませんが・・・

高校三年生にもなつて友達はほとんどおりませんでした。そんなある日、彼女はこんな自分ではいけないと思い・・・他校の男子生徒に思い切つて話しかけました。まあ、友達を作るだけ・・・という理由だつたんですけどね。そして、その行為は実を結び友達はできたのですが・・・問題はその後でした。彼女はある日、その男子生徒が彼女の性格が暗すぎると口走っていたのでした・・・結果、彼女は飛び降り・・・今でも使用されているゴミ捨て場へと落ちたのですが、不幸中の幸いでそのときは助かりました。しかし、彼女はその後・・・命日となる一週間後までずっとベッドの上で過ごしました。死因はわからず、彼女のことは学校側でも問題になりました。そして、この人物の幽霊が出始めたのは一週間後・・・その日はまだ、蝉が騒がしく鳴いていた時期です。一人の少女がその事件のあつたゴミ捨て場を夕方歩いていると・・・一週間前に死んだその女生徒を見たのでした。しかし、そこまでは何事もなく・・・平和でしたが事件が起こつたのはその学校が共学生徒となつてからでした。その日、その少年はその怪談話を友達から聞かされようとしたのですが、その友達は途中で先生に連れられてしまつたそうです。そして、少年は帰宅途中・・・大きなゴミ捨て場にて血まみれで発見されたのでした・・・その事件が以前起こつた彼女の事件を連想させたのか・・・七不思議として話されるようになつたのでした・・・うわさでは、彼女はその事情を知らない男子生徒に再び友達になつてもらおうとしただけだったのですが・・・幽霊の機嫌を損ねたのではないかといわれています・・・

俺は正直その話が怖いとは思わなかつたが他の学校とかにある七不思議とはちょっと異彩を放つてることには気がついた。なんだか血みどろだ。

「あ～なんか、すごい話だな？」

「ええ、そうですね・・・驟雨さんはその幽霊のことなどをどう思いますか？」

話し手としては意見や感想が聞きたいと思うのは当然なのかも知れないな。さて、俺がその話を聞いてどう思ったか……

「・・・まあ、その女子生徒が不便だよなあ。理由はどうあれ、彼女は友達が欲しかった・・・ただそれだけなのにな。まあ、生きてりや友達になりたかったかもな」

「・・・本当にそう思いますか?」

俺と同じ高校生・・・そう思っていた彼女が何か違うものに見えた気がした。だが、それも気のせいだと思って俺はうなづくことにした。

「・・・まあ、そりゃあ・・・夏華さんだって友達といったほうがいいだろ?」「

「・・・確かにそうですが・・・驟雨さんは相手が自分のことをどう思っているか気になりますか?嫌われているのに上辺では友達の仮面を被っている人を友達と呼べるのでしょうか?」

だんだんと近づいてくる彼女にいくばくかの恐怖を感じながらも俺はうなずく。額を冷や汗が通過していく・・・

「・・・た、確かにそうだが・・・俺としては上辺だけ友達面をしている人たちが普通の友達で心の中で信頼し会えている家族みたいな存在・・・いや、ちょっと違うかな?まあ、信頼できる相手のことを親友っていうんじゃないのか?」

「・・・なるほど、そのような考え方もあるんですね?それでは・・・」「

もはや俺と彼女の距離はほとんどない。俺が手を伸ばせば彼女の白い肌に触れてしまうことも可能な範囲だが・・・いまだに彼女から感じ取れるそれは人間のそれとはまったく違うものだった。

「・・・私は驟雨さんにとつての親友ですか?」

「それは・・・どうかな?俺はまだ夏華さんのことをあまり知らないし・・・性格はよさそうだけな・・・まあ、とりあえずずっと一緒にいたら親友になれるんじゃないかな?」

男と女が親友になれるかどうかはさておき、俺にとつて彼女はま

だ右手で数えられる数しかあつたことがない。

「・・・そうですか・・・その、親友という言葉を別に言い換えた
らどのようになりますか?」

「そうだなあ?俺だつた幼馴染がいないから俺にとつて親友って言
つたら幼馴染ぐらい親しい奴のことじやないかな?」

「幼馴染・・・・・

俺のひざに自分の膝を乗つけて俺の胸倉を掴んでいる夏華さんに
少々以上の恐怖を覚えながらも俺は時計の針を確認した。既に、午
後七時を超えている。

「あゝそろそろ俺帰るよ」

「・・・もう帰るんですか?」

「ああ、俺の家、門限厳しいからね・・・・また、遊びに来させて
もらひつよ」

「ええ、待つてますよ・・・・」

俺はかすかな明かりに照らされた瀬見津家の庭園を眺めながら・・
・家を出たのであつた。

「また来てくださいね?」

そして、ずっと俺の後姿を見ている夏華さんに・・・・明かりで
照らされていないはずなのにくつきりと見ることができる彼女をな
るべく見ないように歩き始めたのであつた。

そして、事件が起こつたのがそれから十分後・・・・街角を通り
途中・・・・俺の不注意か相手の不注意か知らないが・・・少しだ
け田舎のここには珍しい大きな車が俺を捕らえた。

何か、強い衝撃が俺を襲い・・・次に浮遊感・・・そして、失墜
していく感じを今まで体験していき・・・・俺の体は地面に叩きつけ
られたのであつた。

そして、俺の視野に映つた最後の光景はこつちを見ている夏華さ
んの姿だった。

幼馴染

三、

田を覚ますとそこには病院の一室だった。

「・・・驟雨、大丈夫？」

隣にはあ母さんと父さんの心配そうな顔がある。

「ああ・・・大丈夫・・・」

記憶があいまいな中、俺は体を起こす。体中がかなりいたいのだが・・・動いているといふことはそこまで大事ではないのかもしれない。

「・・・でも、何で俺は病院にいるんだ？」

「驟雨、覚えてないの？あなたは隣の家の夏華ちゃん家から帰つてこよつとしてねられたのよ」

「無用心にも飛び出したのはお前のせいだら？」

隣の・・・家？

「・・・？」

「お医者様は頭を強く打つたからもしかしたら記憶がないって言つていたかもしれないけど・・・覚えてないの？」

「いや、夏華さんのことは覚えてるけど・・・」

「夏華ちゃんはあなたの幼馴染でしょ？」

そう・・・だつたのだろうか？俺は漠然とした不安と違和感を感じながらベッドから降りようとした。

「・・・お医者様はもう大丈夫だつて言つてたけど・・・」

母さんがそこまで言つと病室の扉が開いて・・・

「しゅ、驟雨君！」

夏華さんが飛び込んできた・・・俺の胸に。

「・・・！」

「あらあら、私たちはお邪魔のかしらね？」

「そうだな、父さんたちは息子の無事を確認できたから仕事に戻る

からな」

抱きついている彼女にかなりの疑問を抱きながら・・・俺は首をひねるばかりだった。彼女が幼馴染・・・本当にそうなのだろうか？「・・・よかつたあ・・・いきなり私が見送っている前で撥ねられましたから・・・あわてて駆け寄ったんです・・・あの、覚えてませんか？」

はねられる以前の記憶を思い出すと・・・確かに、彼女の姿があつたことは確かだつたと思う。だが、何かがおかしい・・・「・・・？」

「あの、もしかして・・・私のことを忘れたとか？」

「・・・いや、覚えている・・・瀬見津夏華さんだろ？」

うなずく彼女に俺は困惑していた。

「そうです！私は驟雨君の幼馴染ですよ？」

「・・・」

余計なことは考えないほうがいいのかも知れない。第一、父さんと母さんがそういうているのだから・・・間違いはないのかも知れないし、お医者様も記憶喪失になつてしまつたかも知れないといつていたではないか。

その俺の表情をどうとつたのか、彼女は俺の顔をじっと見始めた。

「・・・とても心配そうな顔しているけど・・・どうかしました？」

「え・・・あ・・・？」

「親友の私に話してくれませんか？」

親友・・・なんだかその言葉も何かを思い出せそうな響きを持つているのだが、今の俺には無用の長物だつたようで・・・わからなかつた。しかし、彼女が親友だということは間違いないのかも知れない。

「・・・え？と、驚かないで聞いて欲しいんだ。実は、夏華さんとの思い出がほとんど思い出せないんだ。家に行つたことはあるんだけど・・・部屋の内部までわかるんだけどさ・・・どうにも、あんま

り記憶が安定しないみたいなんだ……」

「おおむね、そのようなことを俺が伝える。俺だったら親友で幼馴染にそんなことを言われたらちよつとしたショックを受けるだろう。だが、彼女は笑っていた。

「……大丈夫です……あれだけの事故だったのに驟雨君が生きているんですから……私のことだつて覚えているし、思い出なんてこれから作ればいいじゃないですか？」

ポジティブな考えに俺は驚く。彼女はこんなに明るい性格だつたのかと……だが、そういう考え方のほうがいいのかも知れない。

「…………あ、ありがとう……」

「いえ、かまいませんよ。私たち、親友じゃないですか？といひで、記憶はどの程度まで失っているんですか？」

「…………そうだなあ、俺の記憶では……撥ねられる前に夏華さんの家に突つて『七不思議』の話を聞いた……」

そこまで俺が突つと唐突に彼女が口を開く。その口は何をとられているのだろうか……どこも見ていよいよ見えた。

「……それ、違いますよ？私たちの高校の不思議は七つまでありませんけど？」

「え、そうなのか？」

「ええ、他の方に聞いても事実は変わりません……という」とはそこらへんから記憶があいまいになつていていたみたいですね？」

「うーん、そうみたいだなあ……学校のことはある程度まで覚えているんだけど……」

「他に、私のことでもわからぬことを突つてください」

「夏華さんのことでもわからぬこと……？」「そうだなあ、なんだか名前以外ほとんど忘れたような……」

俺はそういうて考え込んだ。何か思い出すことができないだろうかと悩んだのだが……出てくるものは一向に疑問符だけだった。

「……それなら、また自己紹介をさせてもらいますね？」

「ああ、そうしてくれるとうれしいよ」

「・・・私の名前は瀬見津夏華・・・神塚高校一年生で驟雨君の隣のクラスです。趣味はぬいぐるみを作ることと読書・・・嫌いなものは約束を破ること・・・こんなものでいいですか？」

「ああ、充分だ」

何故だかはじめて知つたようなことなのだが・・・記憶を失つているからかもしないな。いずれ、なくした記憶も元に戻るかもしない。

彼女とはその後談笑してわかれ、俺は医者からの簡単な診察を受けた。既に、異常ないそうで明日からは普通に学校に登校して結構だといわれたのだった。

「よつ、撥ねられたと聞いたときは正直、ヒヤッとしたぜ？」

「まあ、心配かけたな」

そこには少々不思議現象が好きな俺の友達が待っていた。

「・・・なんでも、瀬見津さんがずっと看病してくれていたそりやないか？うらやましいなあ・・・」

「そうなのか・・・せんせん知らなかつた・・・それより、ちよつと聞きたいことがあるんだが・・・その夏華さんのことをせんぜん覚えていないんだ」

俺がそういうと奴は驚いたような顔をしていた。

「覚えていないだつて？まったく、お前は瀬見津さんの幼馴染だろう？」これは空氣を読んで『俺は夏華との愛があつたから生き返れたんだ』とかそういうことを言えばいいのにな・・・

「まあ、それはいいとして・・・とりあえず、教えてくれないか？」

あれから一向に彼女のことを思い出せない。

「・・・しようがないなあ、お前と瀬見津さんは幼馴染・・・それはわかっているな？よし、それでその幼馴染ぶりはすごかつたぞ？幼稚園、小学校、中学校、高校・・・までずっと一緒にいるからな。帰るときも一緒だし、今じゃ、一週間に何度もお前の家に住んでいるそうだけど？」

「・・・そうだったのか・・・」

「それでなあ、一番有名な話は『約束を守つた瀬見津』っていう奴だな・・・」

その話に俺は当然のようになつて食いついた。

「・・・どういう話だ？ 聞かせてくれ！」

「・・・おいおい、そう噛み付くなよ・・・簡単にまとめるに去年の夏・・・そうだな、あの口はよく蝉が鳴いていた。そのとき瀬見津さんが・・・確か、屋上から貧血で落ちそうになつたんだ。それを、お前が必死で止めた・・・それで、逆にお前がそのまま落ちたんだ」

「そうだったのか・・・よべ、この屋上から落ちて死ななかつたものだ。この高校は五階建てだらう？」

「・・・その後からがすごかつたんだよなあ・・まあ、去年の夏からだつたんだけどな・・・ずっと、お前の隣には瀬見津さんがいるぜ？」

「そうだったのか・・・そこまで深い仲だつたとは・・・」

「ここまで俺が言つと奴は

「しかし・・・」といつたのだった。

「・・・俺からみればものすごいカッフルとしか見えないんだが周囲の目は間違いなくお前たち一人を

「親友同士」としか見てない気がする・・・そうだな、この世で一番仲がいい友達の見本だつて言われてるぐらいだからな

「まるで運命共同体だな」

「ま、そんなもんだるうよ・・・ほら、瀬見津さんがきたぞ？」
後ろの扉のほうからは夏華さんが手を振つてゐる。

「いつてやれよ

「ああ、いつてくる」

俺はそういう残して彼女に会いに行つた。しかしながら、ずっと隣にいる女の子をいまだに彼女にできていない俺は奥手なのだろう？ ずっと一緒にいればさすがに・・・彼女と彼氏の関係になつてい

る思つのが……

「夏華さん、どうしたんだ？」

「え・・・いや、体調はどうかなあと思つてきたんです」

うん、俺のことを心配してくれていたのか……本当に心配そつな顔をしているなあ。

「・・・ああ、元気だが・・・友達とかから夏華さんとの話を聞いたりしたんだが、ぜんぜん思い出せないんだ。『めんな

「かまいませんよ。前にも言つたじやないですか・・・これから思

いでは作ればいいって・・・あ、そうだ・・・驟雨君が私のことを思い出したいのなら今日の昼休み、図書館に来てくれませんか？」

それは願つてもないチャンスだ。彼女のことを知ろうとしている俺にとつては渡りに船だ。

「わかった

昼休み、俺は授業がすぐに終わるとそのまま弁当を広げずに図書館へと向かった。外から回つたほうが若干の近道になるので俺は図書館の近くを通つて・・・

「・・・？」

何かしらの違和感を覚えた。辺りにあるものは大きなゴミ捨て場・・・それだけだ。ここが彼女の変わりに俺が落ちた場所なのだろう・・それを思い出しているのかもしない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6041c/>

中身の入った蝉の脱殻

2010年10月8日15時21分発行